

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 聖人の 親鸞鳥



イラスト 中川 学

「何歳になっても捨てる勇氣」

「能楽師になってもなつてみるか」ということを言われることはほぼありません。

二ヶ月に一度はお邪魔していた阿弥陀寺さんに、もうずいぶん長いことがあっていけません。新型コロナのせいで、「お前だれ？」と、そろそろ忘れられそうなので、念のために申し上げておきますと、私は能楽師です。

能楽師なんて職業があるなんてご存知ない方もたくさんいらっしゃいます。高校などで進路の指導がありますが、そのときにも「能楽師になつてもなつてみるか」ということを言われることはほぼありません。

いまテレビでは「俺の家の話」という能の家を扱ったドラマが放映されています。もちろん作り物なので、そのままは信じないでいただきたいのですが、それでも案外面白い。あのドラマのおかげで、能にちよつぱり興味を持ったという方もいらっしゃると思います。

能と狂言とは兄弟芸能で、ほぼ同時期に生まれました。しかし、「能と歌舞伎つてどう違うの」という質問もよくされます。能と歌舞伎は全然、違います。

歌舞伎が現在のようになつたのは今から三百年ほど前です。明治になつて作られた演目も多くあります。それに対して、能や狂言は今から六百五十年ほど前にはすでに完成していました。歌舞伎よりも三百年以上古い。これって自慢のようですが、しかし、だから確かにわかりにくい、とつつきにくい。

でも、能と歌舞伎をいっしょくたにするのはまだまだまし。

「能をしています」というと、だいたい「いやあ、いい趣味をお持ちですね」と言われます。「いや、仕事です」というと、「え、能なんか仕事になるのですか」といわれる。「能なんか」とは失礼です。あんなものにお金を払って観るなんて信じられないという本心が言外に現れています。

もうあきらめて、「いやいや、わかる人がわかればいいんだ」なんて強がりをお願いしたい気持ちにもなります。古いものは確かに古いし、能がつまらないと思われていることも確かです。

しかも、自分の気持ちをよくよく眺めてみれば、「能なんて古臭いものだから」なんていわれて「なにを！」と思ってしまうのは、まるで自分自身にけなされているように感じるからなのです。けなされているのは能なのに、なぜか自分も否定されたような気になる。自分が年を取ったので、古臭いといわれると、まるで自分が古臭い人間だといわれていると感じてしまうのです。

阿弥陀寺さんで寺子屋などをさせていただけと、参加される方は私よりも年上の方がたくさんいらっしゃいます。しかし、とはいっても私も六十五歳。新型コロナウィルスのワクチン接種を優先的に受けることができる年齢です。高齢者と認定されるのは嬉しいような悲しいような複雑な気持ちです。

私が最初に就職したのは公立高校の教諭としてですから、そのまま働いていれば五年前には定年

でした。会社で働いていてもそろそろ定年の年齢。確かに古い人間に分類されても文句はいえませんが、しかし、先日は三十歳の人が「もう年だから」と言っていました。こちらからすれば「まだ若いのに」と思うのですが、本人からすれば「もう年」なのです。

能の世界では六十五歳なんて、「まだまだ若い」部類に入ります。能は三歳くらいから舞台に始まりますが、八十歳、九十歳で現役の方も多くいます。六十五歳なんてまだまだ若い。しかし、六十五歳の能そのものから見れば、九十歳の能楽師ですら「まだまだ若い」です。

ちなみに能が「古いもの」、「つまらないもの」と言われた歴史は案外古く、江戸時代にはすでに「古いもの」、「つまらないもの」と思われていました。

子どもが悪いことをすると「お能を見せませよ」と叱られたそうです。能

はあんなものにお金を払って観るなんて信じられないという本心が言外に現れています。

能や狂言は今から六百五十年ほど前にはすでに完成していました。歌舞伎よりも三百年以上古い。これって自慢のようですが、しかし、だから確かにわかりにくい、とつつきにくい。

でも、能と歌舞伎をいっしょくたにするのはまだまだまし。

を観ることは苦痛だったのです。つまらないと言われたからの年季もかなりのものです。

初心忘るべからず

しかし、能のすごいところは、実はここなのです。すなわち、つまらないと言われ続けている能がこんなにも長く続いていることにあります。

つまらないと思われていた能がなぜこんなにも続いているのか。それは能を完成させた世阿弥の言葉にヒントがあります。「世阿弥の作った能の演目なんてひとつも知らないよ」という方でも、世阿弥の言ったこの言葉はご存知だと思います。

初心忘るべからず

ね。知ってるでしょ。むろん、それが世阿弥の言葉だと知っている人は少ないでしょう。でも、どこかで聞いたことがあるし、ご自分でもこの言葉を使っているという人

は多いのではないのでしょうか。しかし、世阿弥の言う「初心忘るべからず」は、ふだん私たちが使っている意味とはちよつと違います。

初心の「初」という字

は、「衣偏」と「刀」から成ります。もともとは着物を作るときに、布地に鉄を最初に入れること、それが「初」でした。

着物を作るためには反物に鉄を入れなければなりません。それがどんなに美しく染められ、またどんなに精妙に刺繍されたものでも、そこに鉄を入れなければ着物を作ることはできません。同じように、人が進歩をしようと思つたら、自分自身に鉄を入れる、すなわち過去をバツサリと切り絶つ必要がある。

それが「初心忘るべからず」です。

六百五十年間、変わらなれないと思われている能も過去に何度も大きな変化を起こしてきました。それには「初」という漢字が意味するような、血の

出るような大きな変化もありました。それでも「初心」のところで過去の自分たちの芸をバツサリ、バツサリ切り裂きながら、どんどん変化して現代まで継承しているのです。

世阿弥が今の能を観たら、おそらく「あんなのは能ではない」というかもしれませぬ。しかし、三歳の安田登と六十五歳の安田登が外見も内面も全く違うのに安田登であることに変わりはない。変わらなれないものはどんなに変わつても変わらない。

大事なものは変わらない。だから安心して切り捨てよと世阿弥は言います。

年を取つたから「古い」というのはありません。その人が新しい自分を見つげようという努力をやめた、その時点で、その人は「古い人」になつてしまふのです。そういう意味では能には確かに長い歴史がある。しかし、日々初心によつて変化している「新しい」芸能なのです。

いくつになつても初心 さて、親鸞聖人も「初心忘るべからず」と同じことをおつしやつています。ご和讃に次のように詠われました。

いくつになつても初心

さて、親鸞聖人も「初心忘るべからず」と同じことをおつしやつています。ご和讃に次のように詠われました。

本師曇鸞和尚は 菩提流支のおしへにて 仙經ながくやきすてて 浄土にふかく 帰せしめき

親鸞聖人が「本師」と呼ぶ曇鸞和尚は、もともとはお経の注釈をされるような、とても頭のいい方でした。しかし、何事にも一生懸命な方だったので、無理がたたつて五十歳を超えたころに体を壊してしまわれました。

自分のすべき仕事はまだまだ終わっていない。まづは長生きをしなければと道家の師について長命の仙人の術を学び始めました。もとより才能豊かな曇鸞和尚です。仙人の術をこつこつと学び終えて不老長寿の術を身に

付け、「仙經」を授けられ、都・洛陽に戻つてきました。

ちようどそのころ、都にはインドから菩提流支という僧がいて、お経の注釈をしながら、僧たちを指導していました。曇鸞和尚は、かつての自分と同じことをしている菩提流支に、自分が学んだ不老長寿の教えを自慢します。それを聞いた菩提

流支は、阿弥陀様の教えにこそ不死の教えがあると告げ、曇鸞和尚に『観無量寿経』を授けられたのです。

確かに長寿といつても永遠の命があるわけではありません。現代は寿命百年時代と言われているが、だからといって死に臨めばやはり怖いし、長生きしたからといって若死にした昔の人の足元にも及びません。

不死や不老というのは長きではないのです。それに気づいた曇鸞和尚はせつかく授けられた「仙經」をすべて焼き捨てて、浄土の教えの研鑽に勤め

たのです。世阿弥は初心のひとつとして「老後の初心」ということを言いました。

人は生きている限り、生きていくのだから、常に変化する存在です。だから、いくつになつても「初心」が必要です。いくつになつても過去の自分を切つて捨てる、その覚悟が老後の初心です。

しかし、それはこわい地位も名誉もある。切り捨てたら、これから何かを得られる保証もない。このままでいきたいと思ふ。しかし、世阿弥は「老後の初心」といい、いくつになつても切り捨てよというのです。

五十歳を過ぎて、新たに仙人の教えを学び、それを修得した曇鸞和尚。それなのに、せつかく手にした不老長寿をさらに捨てた。これほど激しい「初心」はありません。

私たちのような凡夫は、足元にも及びませんが、それでも日々、自分を切り捨てていく「初心」を肝に銘じたいと思います。